



センバツ70回記念特集／

ルポ●ルネッサンス甲子園
Renaissance
Koshien 1

関大一ナインの練習場所は一つに限らないが、関大高野キャンパスの総合グラウンドなど使用する施設には恵まれている

大阪 関大 一

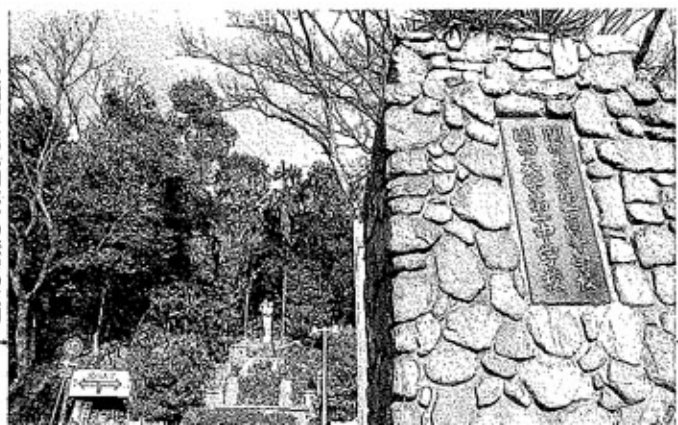
永遠のライバルの遥かなる邂逅

野球の神様も、随分とイキなことをしてくれるものだ。かつて春夏に一度ずつ優勝経験を持ち、63年ぶりにセンバツ切符をつかんだ関西学院。そして、旧称の関西甲種商時代から69年ぶりの出場となった関大。両校のうちのどちらかが出場しただけでもビッグニュースなのに、2校同時、しかも記念大会に甲子園に呼んでしまったのだから……。

「9月の関開戦の時、関大一の尾崎光宏監督とは、近畿大会で会えたらいいですなあ」と話し合ったんです。それがこの結果でしょ。このうえ甲子園で関開戦なんてことになったら、もう死んでもええですわ」と関西学院の広岡正信監督（44歳）。所在地は兵庫県西宮市だが、神戸のハイカラさを漂わせる関西学院と「質実剛健」バンカラな校風の関大。対照的なカラーを持つ両校だが、これまでも良きライバルであり、良き仲間であったのだ。

1978年（昭和53年）、関西学院の運動部長が関大に挑戦状をたたきつける形で始まった「関開戦」は、毎年9月、15の運動系クラブが対校戦を行って総合成績を競う、両校生徒にとっての一大イベントである。加えて3年前からは、6月に野球だけの「関開戦」も行われるようになった。「関開戦」発足からしばらくは関大一の

連戦連勝だったが、ここ数年はほぼ五角。昨年の戦績でいえば、2戦2分けと全くの五分だった。やられたっばなしだった関西学院が関大に拮抗してきたのは、広岡監督が就任した90年ごろからだった。しかし、むやみやたらとシゴキを加えたわけではない。あくまで「自由で伸び伸び」という学校のカラーを壊さずに「勉強にはかり向いていた生徒の気持ちをはたかす」と松岡監督は言う。練習中はレギュラーと控えの区別な



吹田市にある関大一の校舎の正門